相模経済新聞　2019年9月10日号

宇宙生命哲学

ことはじめ

17

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命学者
伊藤　俊洋

乳幼児が育つ環境の重要性について

近年、子供の虐待や、若年層の衝動的な殺人事件が多発している。これは、日本に限ったことではなく、多くの先進国も経験している。この原因を、私の経験を振り返りながら考察してみたい。

ヒトの子は、生まれておよそ1年で二足歩行となり、言葉を話すようになる。この時期に、すでに相手の心を読んで、上手に立ち回ることを覚える。2歳、3歳と歳を重ねるに連れて、親、兄弟、周辺の人たちと意思の疎通を重ねながら、愛情、怨念、誇り、挫折、友好、支配欲、優越感、劣等感、恥辱心など様々なストレスの中で、挫折と回復を繰り返しながら人間としての感性を磨いてゆく。小学校に入学する頃には、憧れや恋心なども芽生える。そして、思春期の難関を乗り越えて、一人前の大人に成長する。

生まれてから3歳までに経験したことは記憶には残らないが、そのヒトの深層心理では岩盤のように蓄積して、そのヒトの行動に強く影響する。私は、子供の教育で最も大切な時期は3歳までだと思っている。親はもとより、大人はこの時期の子供に溢れるような愛情を注ぎ込みながら、できるだけ社会性を身につけさせ、そのためには敢えて社会の荒波に触れさせることも大切であると思う。幼い時期にこの経験がないと、バランスを欠いた人格を身につけてしまう。この時期の手抜きは絶対に許されない。手抜き・虐待で育てられた子供は、社会の負の連鎖に落ち込んでゆく。言うまでもなく3歳以降の教育は更に大切で、なお一層難しくなる。幼児教育は近代社会の最大の課題であると思う。

祖母と0歳、6歳、9歳の三姉妹

私は1941年12月1日に生まれ、3歳8ヶ月までは戦争の真っ只中で育ったが、戦争の記憶は全くない。戦中から戦後の混乱期は、国が存亡の危機にあり、国全体が乳幼児に対し特段の気を配るゆとりはなかった。この時代から団塊の世代の乳幼児たちは、社会の様子をじっくりと観察し、自分達の生き伸びる力を自然と身につけたのではないかと思う。これらの世代の頑張りによって、戦後の復興は果たされ、高度経済成長からバブル経済を経て、さらに格差社会へ移行するに従い、社会の生活形態は複雑かつ多様化し、乳幼児の育てられ方も多様化してきた。特に、これから本格化するAI時代の乳幼児教育に対しては、社会を挙げて細心の注意を払わなければならないと思う。